

日本経済新聞

知ることのがんを防ぎ、打ち勝つ がんセミナーで学ぼう



日本人男性の3人に2人、女性の半数が生涯に何らかのがんに罹患（りかん）します。日本はトップクラスのがん大国ですから、日本人こそこの病気をよく知る必要があります。

私は医師として41年間で3万人以上の患者を診てきました。多くの方ががんを自然災害と同様の、降って湧いたようなものと捉えています。実際には台風や地震などとは異なり、がんは知ることによって制御可能なリスクといえます。

ヘルスリテラシーを国際比較した調査によると、トップはオランダ、ドイツが3位でした。アジアからは保健教育が充実している台湾が5位に入りました。日本はミャンマーやベトナムより低く、最下位に甘んじています。

原因不明で治療法が見当たらないような難病の前には、さすがのヘルスリテラシーも無力です。しかし、がんは知ることによってコントロール可能な病気です。日本人の低いヘルスリテラシーは、がんによる不幸をもたらす大きな要因といえるでしょう。

こうした思いから、来たる3月13日に東京大学の安田講堂で「大人のためのがんセミナー」を開催します。副題は「3人のがん患者から学ぶ『病と人生』」です。

冒頭に「知っておきたい『がんのすべて』」を私がお話しします。恩師で解剖学者の養老孟司先生と、友人で俳優の橋爪淳さんをお迎えし、「病と人生」をテーマに語り合います。「安田講堂がんセミナー」でインターネット検索してください。

※「大人のためのがんセミナー」お申込みはこちらから
<https://form.run/@UTokyo-yasudaseminar-info-260313>

私を含め、3人ともがんの経験者です。養老先生の肺がんと橋爪さんの大腸がんは私が見つかりました。私のぼうこうがんも自己超音波検査で発見しましたから、全員のがんを私が診断したことになります。3人とも東大病院で治療を受けました。

接待問題などにより、東大病院の評判は最近、地に落ちています。この病院で36年間働いてきましたが、こんな恥ずかしい不祥事は見聞きしたことがありません。職員の1人としてこの場をお借りし、陳謝いたします。

他方、東大病院は変化も遂げました。かつては患者より研究を優先する医師も多く、お世辞にもよい病院とはいえませんでした。今は、事務系を含むすべての医療スタッフが患者さんに寄り添う病院に姿を変えています。

もともと病院嫌いを公言していた養老先生も橋爪さんも、今や東大病院のファンといっても過言ではありません。とりわけ養老先生の変わり様はビックリするくらいです。共著「病氣と折り合う芸がいる」（エクスマレッジ）をぜひお手にとってください。

2026年2月18日